

調査地グラヴィーナ・イン・プーリア

風土・歴史・文化

下村滋美*

Gravina in Puglia-The Climate, the History and the Culture

Shigemi Shimomura*

Gravina in Puglia is located in the southern part of Italy. It is a region with a long history, with mankind living in caves made of tuff created from Paleolithic river erosion. The ancient economy was based on agriculture as they grew crops like wheat, grapes and olives. Food culture has developed so that flour, olive oil and wine are specialties of the region.

The town was originally built by Indo-Europeans. Since then it has changed hands many times. It has been under the control of the Romans, the Ostrogoths, the Byzantine Empire, the Sicily Norman dynasty, the Kingdom of Naples(which was replaced by the Spanish Aragonese and French Angevin). Until the unification of Italy in 1861, the ruler of the kingdom was replaced frequently. It was a fief of the Orsini family from 1380 until 1807 and it was able to thrive culturally and economically during that time.

As for religion, the area has been both Byzantine Orthodox and Latin Catholic, depending on the ruler at the time. Each religion brought a different style of art and Christianity. Both cultures and religions were able to coexist in the area.

Key Words: the southern part of Italy, coexistence, the Orsini family, Byzantine Orthodox, Latin Catholic
 キーワード: 南イタリア、共存、オルシーニ家、ビザンツ・ギリシア正教、ラテン・カトリック

1. グラヴィーナ・イン・プーリアの風土

1.1 地理

グラヴィーナ・イン・プーリア(以下、グラヴィーナとする)は南イタリア、プーリア州の州都バーリより内陸部へ約56[km]、マテラから約28[km]の距離にある町である(Fig.1, ・印)。町の名前と同じグラヴィーナ川が流れる峡谷の左右に町は広がる。その川はやがてブラダノ川となり、世界遺産で有名なマテラを通過しイオニア海に注ぐ。人口約45,000人の小さな町である。

現在の町は凝灰岩(tuff)台地の上にあり、川の浸食で削られた洞窟がある峡谷に18世紀に建設された古代ローマの水道橋形式の橋(Fig.2)がかけている。その橋は市街地と考古学的遺跡や洞窟のある地域を結んでいる。



町は迷路のような狭い道(Fig.3)の旧市街区と、市壁の外側に近代に拡張された新市街区から形成されている。また、近年になって、広場や個々の家の地下およそ25[m]のところに、大きな空間の地下都市が発見された(Fig.4)。

古代において、地下水のみならず、地表を流れる雨水も利用していたことがテラコッタ製排水溝の発見から明らかになった。峡谷をまたぐ全長3800[m]の水道橋は、オルシーニ家の支配時代、周辺の水源地から町に水を供給する目的で建設された。また、凝灰岩台地は加工しやすく(Fig.5)、旧市街区の家々は、上部の建造物を建てるために凝灰岩を切り出した後の地下空間部分を、穀物やチーズ、ワインの貯蔵庫として利用している。このような地下では、壁に十字架のレリーフや宗教的な主題の絵(聖餐杯など)などが



* 金沢大学フレスコ壁画研究センター

* Research Center of Italian Mural Paintings

描かれ、神聖な祈りの空間としての役目もあったと考えられている¹。今回見学した地下都市には、貯蔵庫や祈りの空間としての役目はもちろんのこと、ぶどうの搾取器や、最近になって発見された約3,000[t]の大きな貯水槽もあった。

イタリア半島にはアペニン山脈が背骨のように走っているが、ここでは見渡す限り周囲に高い山はなく、日当たりのよい肥沃な丘陵地帯が広がっている。古代遺跡が発見されたボトロマーニョ (Botromagno or Petramagna) と呼ばれる丘陵地帯には多くのオリーブの木が植えられている。

気候は典型的な地中海式気候で、夏は暑くほとんど雨は降らないが、温暖な冬には少し雨が降る。

夏には、灼熱の太陽の陽射しが強く、また雨も降らないため、自動車の多くは砂埃をかぶり、白っぽくなっている。湿度が低いえ風が乾いているため、日本のように蒸し暑くない。

1.2 産業と食文化

一年を通して降水量が少ないため、古くから灌漑農業と羊の放牧がおこなわれている。秋に種をまき初夏に収穫する冬小麦の産地である。今回訪れた9月には収穫はすでに終わり、種をまくために開墾された畑が一面に広がっていた。

現在の南イタリアの荒涼たる景観からは想像しがたいが、古代ローマ時代には広い森林が存在し、中世においても自然の豊饒さを述べた史料は数多い。しかし、ローマ時代から続く大土地所有 (ラティフンディア²) の普及拡大、奴隷反乱の増大、マラリアの蔓延、度重なる戦乱の舞台になるなど土地の荒廃が進行したが、商品作物を中心に、それでも高い農業生産高を維持していた。近代が近づくにつれて、北イタリアでは北西ヨーロッパの農業革命を導入し農業生産高が上昇した。ところが、南イタリアにおいては古くから踏襲されている封建的大土地所有 (ラティフンディア) が存在し、それが近代的農業の発達を阻害する原因となった。そのため、灌漑農業と樹木栽培に頼らざるを得ない状況が続き、商品作物生産中心の南イタリアでは集約農業が行われず農業の後進国となった。1861年のイタリア国家統一の過程において、南部の経済的後進性が表面化したのである³。しかし、南イタリアの産業の中心は農業であることには変わりはなく、第2次世界大戦の敗戦国となったイタリアが国際競争力をつけるには、工業化もさることながら、南部における農業の発達が必要不可欠であったため、農業改革、南部開発政策が実施され、近代的な農業がおこなわれるようになった。封建的大土地所有が解体されて以来、現在ではオリーブやブドウなどの樹木栽培による小農民経営と放牧が中心となっている。

太陽の恵みをふんだんに受けるこの地方では、食文化が非常に発達している。古くから穀物生産が盛んで、小麦⁴などの穀物、ブドウ、イチジク、ヒラウチワサボテンな



どの果樹 (Fig.6)、オリーブ、野菜が栽培され、経済の基盤は農業である。その理由から、グラヴィーナの紋章は穀物の穂とブドウの枝がシンボルになっている (Fig.7)。毎年9月、ブドウの収穫期には、旧市街地の広場で、町を挙げての収穫祭が賑やか

に開かれる。オリーブ栽培はB.C.6~5世紀に小アジアからギリシア経由で伝わったといわれている。現在、プーリア州には約5,000万本の樹齢の長いオリーブの木があり、収穫は11月から1月頃にかけておこなわれる。特産品はワイン、上質な硬質小麦粉 (セモリア種)、オリーブオイルであり、オリーブオイルの国内シェアは44[%]、世界シェアは12[%]である⁵。

プーリアのパンは炭焼き石窯で焼く昔からの製法でつくられ、バターや牛乳、卵をいっさい使わず、材料は小麦粉と塩と酵母と水のみである。硬質小麦粉から作られるこの地方特有のパスタはオッレキエッティという耳たぶ型のパスタである。また、市場で売られているトマトの種類の多さと美味しさに驚く。唐辛子も特産品のひとつで、日本では見かけないが、市場や野菜屋の軒先に赤い花束のようにぶらさがっている (Fig.8)。日本の唐辛子と比較すると、かなり大振りだが、味はピリリと辛い。ブドウ栽培やワインの製法はギリシアから伝来したもので、ブドウの品種は赤ワイン用が多い。豊富な種類の果物は市場で山積みになっている。そばに大きな天秤が置いてあり、グラム単位で売られている。外見が日本と違う果物は



イチジクである。日本のものは軟式テニスボールくらいの大きさだが、イタリアのものはピンポン球くらいの大きさしかない。また、表面の色も日本のものとは違い緑色だが、果肉は赤くて甘い (Fig.9)。

市場には多くの食料がならべられ、南イタリア、特にプーリア地方は古くからイタリアの穀倉地帯であることはうなずける (Fig.10)。チーズもたくさんの種類が売られているが、ブッラータと呼ばれるチーズが珍しい。これは、水牛や牛の乳から作る糸引きチーズのモッツァレッラチーズである。小振りの丸い形で、店の冷蔵ケースの中にいくつもまとめてぶら下げられている。



1.3 人々の生活

北イタリアと比べると、南では時間の経過が緩やかで、地中海世界の古き良き伝統の暮らしが続いている。午前の仕事が終われば、昼食のために家に帰り、ゆっくりと3時間くらい午睡 (シエスタ) をとる。その間、博物館や教会、小さな観光案内所や小売店などではシャッターが下ろされてしまう。そして、人々はおもむろに16時くらいから仕事に戻る。午後の12時から16時くらいまで開店しているのはレストランやパルだけである。しかも、多くの住民たちは家族と一緒に自分の家で食事をするほうが多いのか、レストランで食事をする

人は決して多くない。シエスタの時間、働いているのは我々だけだったという記憶が残っている。

毎晩、彼らが夕食を食べ始める時間は20時半とか21時からである。夜のレストランの開店時間は日本に比べるとかなり遅い。そして、真夜中にいたるまで町の広場やあちこちで、集まってきた老若男女の楽しそうな笑い声や話し声が聞こえてくる。昼間の閑散とした町からは想像できない。日本人の生活のリズムとはまったく違うことを実感する。

2. 19世紀までの歴史

ヨーロッパの国々の歴史をみると、それぞれの民族がヨーロッパ大陸を舞台に興亡を繰り返す、その勢力範囲を数多く塗り替え、時代ごとに地域ごとに大変複雑な歴史を繰り返してきた。その中でも、特に複雑な歴史は、今回の調査地のある南イタリアである。

イタリア半島の北・中部では、都市を中心にした領域国家が成立し、都市国家の形態を維持していた。半島南部では、頻繁に支配者が交代したが、1861年の国家統一まで集権的君主制国家が続いていた。このイタリア半島統一は北のサルディーニャ王国による南のナポリ王国の征服と考えられている⁶。統一とともにクロースアップされてきたイタリアにおける南北問題では、当然おこるべき要素がこの南北両地域の異なった歴史の中に数多く存在する。今回の調査地の舞台であるグラヴィーナはまさにその南イタリアに存在する。約3,000年にわたるこの町の歴史を南イタリアひいてはイタリア史全体の中でとらえ、その歴史的な位置づけを考えたい。

2.1 先史時代からギリシア・ローマ時代

グラヴィーナの地域は豊富な水のおかげで、旧石器時代から人々が居住していたことが確認されている⁷。B.C.1500年頃には、イタリアキと呼ばれるインド・ヨーロッパ系語族がイタリア半島を南下して、中部イタリアからティレニア海にかけて高度な文化を形成した⁸。パリーからグラヴィーナの地域に根を下ろしたイタリアキはペウケティ人(Peucetians)と呼ばれる人々であった。B.C.1000年頃から始まる鉄器時代には、市街地西方にあるボトロマーニョ(Botromagno or Petramagna)の丘に村落が発展した。その丘の頂上付近で、考古学的遺跡が発見され、発掘された陶器の壺などから、多くの専門家たちはその年代をB.C.9世紀ないしB.C.8世紀からB.C.4世紀頃と推定している⁹。また、丘の麓にも近年パードゥレ・エテルノ(Padre Eterno)と呼ばれるほぼ同時代の遺跡が発掘され、このあたりにも人々が住んでいたことが確認されている。

B.C.8世紀には、東地中海からギリシア人が南イタリアへの集団的な海外移民活動を展開し、シチリア島東部海岸やイオニア海沿岸にギリシア植民市を建設しはじめる。このようなギリシア世界との経済的・文化的な関係強化が、南イタリアに広がるイタリアキの都市でも重要となり、例にもれず、グラヴィーナもギリシアの多大な影響を受け発展していく。町はギリシア語のシディオ(Sidion¹⁰)と名づけられ、その周囲には強固な城壁がはりめぐらされ、通商も盛んになり、この町独自の貨幣も铸

造され繁栄した。ちょうどその頃、強大な勢力になりつつあった都市国家ローマがイタリア半島征服の野望をいだき、南イタリアでローマの脅威となっていたイタリアキの山岳民族サムニウム人との間で戦いを繰り返した。サムニウム人たちは、3回に及ぶサムニウム戦争でローマに屈服し、グラヴィーナもB.C.305年ローマに征服された。しかし、南イタリアにはローマの支配に抵抗していたルカニ(現バジリカータ州)、ブルッティ(現カラブリア州)などのイタリアキ諸族が残っていたし、独立を守るギリシア植民市の存在もあり、最終的にローマが南イタリアを完全制圧できたのは、ギリシア植民市タレントゥム(現在のターラント)を陥落させたB.C.270年代初めであった。

「すべての道はローマに通ず」の言葉通り、数多くの道がローマを起点に建設されるが、最初に作られたのがローマからタレントゥムを経由してプリンディシまでをつなぐ軍用道路アッピア街道(B.C.312年建設開始)である。ローマの支配下に入ったグラヴィーナはラテン語読みでシルウィウム(Silvium¹¹)と呼ばれるようになり、アッピア街道沿いの農業と商業の重要な町として発展し、特に物資補給と軍馬の重要な拠点となり繁栄をきわめる。終点のプリンディシは、東方世界への玄関口であったため、領土拡大を続けるローマにとって最重要街道であったといえる。しかし、紀元後2世紀初め、海岸線に沿ってプリンディシに至る新しいトラヤヌス街道が建設されたことにより、アッピア街道はこれに取って代わられた。

その後、ローマは3回に及ぶポエニ戦争で、北アフリカの商業国家カルタゴを歴史上消滅させ、最初の属州シチリア獲得を手始めに、海外領土獲得の快進撃を続け大帝国への道を歩み始める。この海外膨張策を通して、イタリアに莫大な富と大量の奴隷が流入する¹²。おびただしい戦利品、属州となった地域からの税金など様々な収入が流れ込み、多くの奴隷たちは生産労働に従事させられた。その結果、ローマの経済に与えた影響は計り知れないものがあり、農業の面では生産規模の巨大化が進み、市場向けの商品作物の生産が促進された。特に、南イタリアやシチリアでは投入された奴隷たちによる生産労働を基盤とする大土地経営(ラティフンディア)が発展し、オリーブやブドウの栽培がさかんにおこなわれた。グラヴィーナでも大規模なラティフンディアが経営されていたと考えられる。商品価値の高いオリーブオイルやワインなどは地中海各地に輸出され、イタリアに莫大な利益をもたらした。

政治的にはその後、ローマ共和制からローマ帝国へと移行する。ローマは初代皇帝オクタヴィアヌスの時代から約200年間「パックス・ローマーナ」といわれる繁栄した時代を謳歌するが、やがて混乱期の軍人皇帝時代を迎える。284年に即位したディオクレティアヌス帝によるローマ帝国再建後、コンスタンティヌス帝によるローマからコンスタンティノープルへの遷都、そして395年の東西分裂後、ついに476年ゲルマン人傭兵隊長オドアケルにより西ローマ帝国は滅亡し、古代が終焉を迎える。

2.2 ゲルマン民族大移動からビザンツ帝国支配

この頃には、もうすでにゲルマン民族が大移動(375年頃開始)をしており、ローマ帝国領は至る所でゲルマン人により蹂躪されてしまう¹³。相次ぐ戦乱の中、456年、グラヴィーナは、

ローマおよびイタリア沿岸部で掠奪を繰り返していたゲンセリック王率いるヴァンダル族の襲撃で破壊されるが、生存者たちは先史時代の住居であったグラヴィーナ峡谷の洞窟へと逃げ延びた。

その後、東ゴートのテオドリック大王、ユスティニアヌス帝をはじめとする東ローマ帝国によるイタリア支配も長くは続かず、568年ゲルマン人の一派であるランゴバルド族の王アルボインがイタリアに侵入し、ミラノを占領して王国を建設した。この時、東ローマはかろうじて南イタリアを確保することができ¹⁴、グラヴィーナは東ローマ帝国領として残った。

7世紀に入ると、東ローマはギリシア文化とギリシア正教(東方教会)¹⁵を基盤にした独自の世界を形成するようになり、ビザンツ帝国と呼ばれる時代に突入する¹⁶。南イタリアにおけるビザンツ帝国領には、9世紀から11世紀にかけて、2つのテーマ¹⁷が存在していた。ビザンツ皇帝の代理である長官が支配するプーリア地方にはランゴバルディア・テーマが成立し、近隣からランゴバルド系の人々が流入し、ギリシア系修道院(ギリシア正教)のみならず、ラテン系教会(ローマ・カトリック)も存在していた。

ビザンツ帝国領下のグラヴィーナの人々は峡谷の左に位置する洞窟へと渡っていき、新しい岩窟都市と呼ばれるピアッジョ(Piaggio)とフォンドーヴィコ(Fondovico)の2つの区域に住むようになった。この町最初の大聖堂といわれる洞窟教会のサン・ミケーレ・デッレ・グロッテ教会が建設されたのはこの時代である。聖ミケーレ信仰が広まり¹⁸、町は広範な行政上の自治権を獲得し、農業や手工業が発展した。その後、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会やパードゥレ・エテルノ教会などの洞窟教会が次々と建てられ、やがて中世には地上部の平野に村が形成され、岩窟都市は衰退していく。

ところが、9世紀初め北アフリカのイスラーム教徒(サラセン人)はビザンツ帝国領シチリア島の征服を手始めに、南イタリア一帯にも侵入を繰り返し、ついにパリーとその周辺を支配下に入れる。970年にファーティマ朝¹⁹から自立したシチリア総督アブー・アルカーシムは、977年ごろグラヴィーナへの襲撃を繰り返し²⁰、3度目の攻撃で、町は完全に破壊されてしまった。サン・ミケーレ・デッレ・グロッテ教会には、大天使ミケーレによって守られることを信じて、そこに隠れた多くの市民たちが大虐殺されたという銘文が残っている。現在、洞窟教会内にはこの襲撃で犠牲になったといわれる人々の骨が安置されている(Fig.11)。その後も、南イタリアはシチリアからのイスラーム教徒による定期的な掠奪に苦しむが、このような定期的な襲撃の目的には無差別な奴隷狩りが含まれていた。なぜなら、南イタリアからおもに輸出されていたのはランゴバルド奴隷であったことが史料からわかっている²¹。同時代の聖者伝の中には奴隷として売られた後、脱して故郷にたどり着くという内容のものが多く²²、このようなランゴバルド奴隷の売買が一般的におこなわれていたことがうかがえる。しかし、915年、ガリニャーノ川の戦いでイスラーム勢力が南イタリアから一掃され、10世紀半ばになると、対イスラーム教徒

との貿易は奴隷貿易から現地特産物貿易へと移行している²³。

2.3 ノルマン朝シチリア王国時代

北フランスからノルマン人²⁴たちが南イタリアへやってきたのはその頃である。「ノルマン人のイングランド征服」(1066)と時を経ずして「ノルマン人の南イタリア征服」がおこなわれた。彼らが南イタリアへやってきた当初の目的は、南イタリアにおいて聖ミケーレ信仰で有名だったモンテ・ガルガーノへの巡礼だった。その頃、ランゴバルド貴族のメレースがビザンツ帝国に対して反乱をおこしたが、敗走中にノルマン人巡礼者に遭遇し、彼らに救援を頼んだといわれている。また、ノルマン人巡礼者たちがイェルサレム巡礼の帰路、たまたま立ち寄ったサレルノがちょうどイスラーム教徒に包囲攻撃されていたので、彼らはサレルノ軍へ加わったともいわれている²⁵。ともかく、南イタリアでは諸勢力間の争いが絶えない状態であったため、勇猛果敢なノルマン人兵士たちに対する高い需要があった。南イタリアの各勢力はノルマン人たちを傭兵として雇い、その結果、多くのノルマン人たちがノルマンディー公国からやってきた。その中で、寒村オートヴィルからやってきた若者たちが南イタリアの統一を果たす。

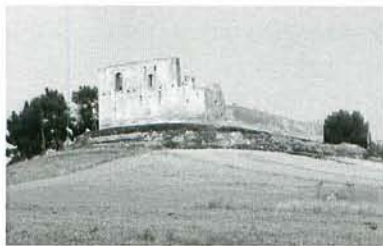
プーリア(古名アプーリア)を拠点に支配領域を拡大していったのは、ロベルトゥス・グイスカルドゥスの兄弟たちであった。ビザンツ帝国に反旗を翻すランゴバルド人たちに傭兵として協力していた長男(鉄腕ウィレムス)は、当時南イタリアの国際政治で主導権を握っていたサレルノ公(グアイマリウス5世)より、征服した地域を封土として与えられ、グラヴィーナが彼の支配下に入ったのは1042年だった(プーリア公国の成立)²⁶。その後、三代目フンフレドゥスの時代に、町は人口の上でも社会的にも経済的にも飛躍的な大発展をする。フンフレドゥスはピアッジョとフォンドーヴィコの間の地区に城をつくり、ロマネスク様式の大聖堂も創建した。1091年の史料は、999年以来イスラーム教徒によって消失していた司教座が、彼の寄付により回復されたことを記録している²⁷。フンフレドゥスは、争いの絶えない時代において、司教座を中心に平和な生活を望んだ偉大なる支配者であったといえよう。その跡を継いだのが、ノルマン征服期の中心人物、南イタリアの統一に成功するロベルトゥス・グイスカルドゥスである。彼はプーリアの反抗する家臣たちを力でねじ伏せ支配を拡大していった。そして、彼によるビザンツ領最後の拠点パリー征服(1071)をもって、ビザンツ帝国は南イタリアの支配領域をすべて失うこととなった。強大な権力を維持していた彼の死後(1085)、南イタリアのノルマン人諸国家の中で唯一統一性を保持していたのが彼の弟ログリュス1世のシチリア伯領だった。やがて、その子供のログリュス2世が1105年にシチリア伯になり、1127年プーリア公になる。そして、1130年ログリュス2世はノルマン朝シチリア国王として即位し、シチリア島から南イタリア全域にわたり支配を確立する。しかし、実際の半島部の行政単位は以前の国単位であり、王の息子たちに与えられた。つまり、プーリア公国はそのまま王国の行政区分として利用され、その公はログリュス2世の長男ログリュスであった。しかし、実際の行政は王の役人たちにゆだねられ²⁸、公国内の実質的な行政単位は都市、グラヴィー



ナ伯のような世俗諸侯、聖界諸侯(司教、修道院長)であった²⁹。1159年からグラヴィーナ伯に封ぜられたのは、ロゲリウス2世の後継者ウィレムス1世の妃であったマルガリータ³⁰の従兄弟ギルベルトゥスであった。彼は1159年にシチリア女王であったマルガリータを頼りシチリアへ来た後、ウィレムス1世によりグラヴィーナ伯領を与えられている³¹。

1187年、ウィレムス2世の死後、王位継承争いが生じる。最終的には、王位継承は初代ロゲリウス2世の娘であるコンスタンティアに引き継がれ、その夫である神聖ローマ皇帝ハインリヒ6世が1194年シチリア王として即位し、ここにドイツのホーエンシュタウフェン家によるシチリア王国支配が始まる。1197年、ハインリヒ6世が他界し、3才の息子フレデリクス2世にシチリア王位が継承された。父の後を追うように母コンスタンティアも他界した後、彼はシチリアのパレルモの宮廷で育てられる。1220年、フレデリクス2世はシチリア王にして神聖ローマ皇帝となった³²。以後、約30年に及ぶ彼の支配が始まる。そのフレデリクス2世がグラヴィーナを初めて訪れたのは1223年のことである。彼はグ

ラヴィーナの森や川、この地域に生息するさまざまな種類の鳥たちなどの美しい自然に心を奪われ、1224年フィレンツェ出身の建築家でもあり彫刻家のフッチョ(Fuccio)に、狩りの足場としてロ



マネスク様式の城の建設を命じた³³。今ではすっかり廃墟となり、残存している周囲の石壁だけが往時をしのばせている(Fig.12)。1250年のフレデリクス2世の死後、神聖ローマ皇帝位は息子コンラート4世が継承するが、シチリア王国は庶子マンフレディが実力で統治していた。しかし、教皇はシチリア王位をフランスのアンジュー家のシャルル・ダンジュー(ルイ聖王³⁴の弟)に授封した。1268年、シャルル・ダンジューはホーエンシュタウフェン家を断絶させ、南イタリアの支配権を獲得する。ところが、その支配が過酷だったため、シチリアでは反フランス感情が表面化し、1282年、ついに「シチリアの晩祷」と呼ばれる事件が起こり、フランス人が大量虐殺された。その結果、シチリアではスペインのアラゴン家の支配が確立し(シチリア王国)、フランスのアンジュー家は南イタリアのみを支配する結果となった(ナポリ王国)。1309年にナポリ王になった3代目ロベルトゥスは文化を奨励し、フィレンツェから招聘したジョット³⁵など多くの芸術家を庇護したが、その死後王権は著しく衰退し、1442年シチリア王であるスペインのアラゴン王アルフォンソ5世がナポリ王位を兼任することとなった。王国の実質的な支配権は、世俗諸侯たちが掌握しており、1380年からグラヴィーナを支配していたオルシーニ家のフランチェスコがアラゴン王アルフォンソ5世からグラヴィーナ伯に封ぜられたのは1443年のことであった。それ以来、ナポリ王国の支配者はめまぐるしく交代する³⁶が、1807年³⁷までグラヴィーナは領主であるオルシーニ家の支配下で経済的にも文化的にも安定した繁栄時代を迎える。

2.4 オルシーニ家支配時代から国家統一へ

約400年にわたるオルシーニ家の支配の下、グラヴィーナでは教会などがオルシーニ家によって建設された。駅近くにあるマドンナ・デッレ・グラツィエ教会、サン・セバスティアーノ教会、ブルガトリオ教会など数え上げたらきりが無い。オルシーニ家のもっとも繁栄した時代は、第11代グラヴィーナ伯フェルディナンド3世の時代である。彼は1629年にグラヴィーナの封土を相続し、トルファ(Tolfa)のジョヴァンナ・フランジパーネ(Giovanna Frangipane)と結婚し、1650年にピエトロ・フランチェスコ・オルシーニをもうけている。ドミニコ会修道士であったピエトロは長じて、1724年に教皇ベネディクト13世になった(Fig.13)。現在も、市民たちは教皇ベネディクト13世を輩出したこの町をこの上もなく誇りにしていることがうかがえる。



1789年におこったフランス革命はヨーロッパの国々に多大な影響を与え、ナポリでは1796年革命が起こり、その結果、ナポリ共和国(1796~1799)が樹立される。グラヴィーナの多くの市民たちはこの短命なナポリ共和国の樹立を支持した。

1806年、フランス革命後のヨーロッパで支配を確立しつつあったナポレオンの兄、続いて妹婿がナポリ王となり王国内の封建制が廃止され、グラヴィーナでも、グラヴィーナ伯としてのオルシーニ家の支配が終わる。南イタリアにおいて1000年以上にわたり、頻繁に交代を繰り返した支配勢力に翻弄されながらも、確固たる町の歴史を積み重ねてきた人々にとって、1807年のオルシーニ家による支配の終わりは、グラヴィーナの栄光の歴史の終焉を意味していた。しかし、ヨーロッパを席捲したナポレオンの失脚後、ウィーン会議(1814~15)で南イタリアでは再びスペイン・ブルボン家による支配が復活し、イタリア半島は9カ国に分割再編成されることとなる。当然ながら、イタリア統一への気運が高まり、独立と憲法制定の要求を掲げた自由主義運動が活発になり、南イタリアで結成された秘密結社カルボナリ党³⁸の運動にグラヴィーナの市民たちは巻き込まれていった³⁹。その中で、国家統一への主導権を握ったのはサルディーニャ国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世である。首相カヴールの外交が功を奏して、サルディーニャ国王は半島支配を拡大していく。1860年、義勇兵千人隊(赤シャツ隊)を率いたガリバルディがシチリア遠征を行い、征服した南イタリアをヴィットーリオ・エマヌエーレ2世に献上し、イタリアの大部分がサルディーニャ王国に併合される結果となった。

南イタリアでは1861年のはじめから、「山賊大反乱」と呼ばれる農民反乱が農村や山村で広範囲に勃発していた。5年がかりでようやく鎮圧されたこの反乱をみて、北イタリアの人々は南イタリアを経済的発展のたちおくれた未開と貧困の世界とみなし、ここにイタリアにおける南北問題の萌芽がみられる。これまでみてきたように、約1300年間、全く違った政治体制で発展を続けてきた北イタリアと南イタリアの統一は、話す言葉、文化など民族的共通意識に大きな違いこそないが、国としての性格が全く異なる世界の統一と考えられる。第2次世界大戦後

の南北あるいは東西に分割された国々の再統一とは明らかに事情が違ふ。このように、19世紀までの南イタリアの歴史を中心にみても、イタリアにおける南北問題の根幹には北と南の歴史的な国家形態の違いに原因の一つがあると考えられる。長きにわたり継続された南イタリアの封建的国家の諸要素が統一後の近代国家への道のりに大きな障害となったことは否めない。

3. グラヴィーナ・イン・プーリアの文化と宗教

3.1 先史時代からノルマン朝シチリア王国

ボトロマーニョ地域にある墓の遺跡から、B.C.8世紀以降のギリシアの壺が数多く発掘されている。墓標として作られた幾何学様式の壺（B.C.6世紀）（Fig.14）や、何種類ものギリシア神話の図像が描かれたクラテル⁴⁰（B.C.5世紀末）など多くの断片が発掘されている。ギリシア植民市の影響を何世紀にもわたって多大に受けていたことや特産品のワインが人々の喉を潤していたことなどがわかる。



前章で述べたが、ローマ時代、ボトロマーニョの丘の上にはシルウィウムという町が建設されていた。その町はアッピア街道の通過拠点として大いに繁栄し、遺跡からはブロンズのすねあてやヘルメット、ベルト、垢すり器⁴¹、矢や剣などの武具も数多く発掘されている。墓だけではなく、ローマ時代の大きな屋敷などの住居跡も見つかっている。

476年、西ローマ帝国滅亡後、頻繁に支配者は交代するが、最終的にはプーリアではビザンツ帝国の支配が続く。その結果、ギリシア正教が伝わり、ビザンティン様式の美術が発展する。この時代、南イタリアに住み着いた人々は、イスラーム教徒による襲撃から逃れてきた帝国の東方の人々、ビザンツ皇帝レオ3世の聖像禁止令(726)に始まるイコノクラスム時代⁴²の聖像擁護派の人々などである。東方世界から逃れてきたキリスト教徒たちは峡谷に穿たれた洞窟の壁にキリストや聖人たちの絵を描き、洞窟教会としての機能をもたせ、そこに住み着いた。それらの壁画はビザンティン美術の貴重な遺産である⁴³。今回の調査対象となった洞窟教会は、峡谷を挟んで町の反対側に位置するパードゥレ・エテルノ教会（Fig.15）、町の南西端にあるサン・ミケーレ・デッレ・グロッテ教会（Fig.16）、町の南にあるサン・ヴィート・ヴェッキオ教会（Fig.17）である。これら教会内の壁画はビザンティン美術の特徴を持っている。今回調査した中で最も保存状態の良い壁画は、現在、エットーレ・ボマリチ・サントーマジ財団博物館内に移築されているサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画であ



る。後陣には「パントクラトールのキリスト」が描かれ、キリストは左手に聖書を持ち、右手で祝福のしぐさをしている⁴⁴。そして、いかなる時代でも、誰によって描かれても、キリストは必ず十字架をあらわす線が入った特別な円光を持っている（Fig.18）⁴⁵。側壁には、正面向きの聖人たちが並立して平面的に描かれ、左手にはそれぞれ象徴するものを持ち、右手では一様に祝福のしぐさをしている。円光の縁には白い点々が施され、大きく見開かれた目や、くっきりとした曲線を描く眉毛など、ビザンティン美術の特徴がみられる。しかし、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画が描かれたころ（12世紀末から13世紀初め）、グラヴィーナはビザンツ帝国領ではなく、ノルマン朝シチリア王国の支配下にあった。美術の流れの中で、「12世紀ルネサンス」⁴⁶といわれる文化の花開いた時期があった。つまり、ギリシア語、アラビア語の著作がラテン語に翻訳され、アリストテレスやプラトンの哲学、プトレマイオス⁴⁷やユークリッド幾何学といったギリシア・ローマ文化の古典が数多くヨーロッパへ紹介された。その中心になった国こそが、まさしく、このロゲリウス2世のノルマン朝シチリア王国であった。ギリシア・ビザンツ文化圏とラテン・カトリック文化圏とアラブ・イスラーム文化圏という異なる文化的要素が共存し⁴⁸、多くのラテン系の知識人たちがギリシア語やアラビア語の写本、そのラテン語訳を求めて南イタリアを訪れた⁴⁹。この共存する文化圏に、グラヴィーナは位置しており、特に文化的にはラテン系とビザンツ系のものが融合していたと考えられる。前章でみたように、襲撃こそあれ、グラヴィーナへのイスラーム教徒の移住の可能性は低いと考えられるため、グラヴィーナではアラブ・イスラーム文化受容の確認は困難であり、南イタリアでのアラブ・イスラーム文化の影響は今後の課題としたい。



さて、726年の聖像禁止令（ビザンツ皇帝レオン3世発令）は、特にゲルマン人へのキリスト教布教のために聖像崇拝を黙認してきたローマ・カトリックと偶像崇拝を認めないギリシア正教の対立を表面化した結果となり、教皇は800年にフランク王国のカール大帝を「ローマ皇帝」に戴冠し、ビザンツ皇帝から完全に自立する。843年には、イコノクラスムは聖像擁護派の勝利で一応の決着をみるが、1054年東西教会は完全に分離してしまう。そのような状況下での南イタリアの宗教問題をみると、ノルマン朝自体はラテン・ローマカトリック世界の北フランスからやってきたノルマン人が建てた国であり、実際、ロゲリウス2世は教皇に宣誓をしている⁵⁰。ゆえに、ローマ・カトリック世界だが、そこに住む人々は長い間ビザンツ帝国領だったこともありギリシア正教の信徒が多く、またギリシア正教の教会も多い。つまり、ノルマン朝シチリア王国では、文化と同じく、宗教上でもローマ・カトリックとギリシア正教とは対立することなく共存していたようである⁵¹。

3.2 グラヴィーナ伯オルシーニ家の時代

オルシーニ家支配時代になると、ギリシア・ビザンツ的なものが後退し、ラテン・カトリック的な文化に傾倒していく。宗教もローマ・カトリックが優勢になってくる。オルシーニ家自体、もとはローマの有力貴族であり、一族から教皇を3人も輩出している。そのうちの一人が、グラヴィーナ伯フェルディナンド3世の息子、ベネディクト13世である。彼はドミニコ会修道士であったことは先に述べた。

約400年にわたるオルシーニ家の統治時代、多くの重要な建物が建設されている。

まず、旧市街のグラヴィーナ峡谷の端にそびえている大聖堂(Fig.19)だが、前身は3代目ブーリア公フンフレドゥスが11世紀に創建したものである。ファサードにはバラ窓があり、ロマネスク様式とゴシック様式の要素が巧みに融合されている。しかし、15世紀半ばに火事(1447)や地震(1456)が起こり⁵²、ダルマチア⁵³の工匠たちにより再建されたため外観はルネッサンス様式になっている。また、17世紀から18世紀にかけても改修され、内部は創建当初の装飾を残しながら、3身廊、鍍金された木の天井、南側入口の上には「聖ペテロ」「聖パウロ」「復活のキリスト」のバロック様式の彫刻装飾が施され、ロマネスク様式、ゴシック様式、ルネッサンス様式、バロック様式といった異なる様式が見事に調和している。



大聖堂の近くには、オルシーニ家のフェルディナンド3世が一族の納骨堂として建設したブルガトリオ教会(1649年～1654年建設)(Fig.20)がある。扉口のティンパヌム⁵⁴には、人間の人生のはかなさやもろさを象徴するために骸骨が飾られており、入口両側には熊⁵⁵の彫刻が置かれている。内陣には大理石の見事な主祭壇があり、その背後の壁にはバロック様式の金色額縁で縁取られたフランチェスコ・グアリーノが描いた「代禱⁵⁶の聖母」がある。彼は、当時ナポリで活躍しており、カラッパッチョ⁵⁷の影響を受けたバロックの画家で、フェルディナンド3世によってグラヴィーナへ招聘され、この教会やオルシーニ家の邸宅用の絵画装飾などを任されたが、それらを完成することなく、突然1651年にこの地で亡くなっている⁵⁸。



また、この時代、グラヴィーナではマジョリカ焼き⁵⁹(Fig.21)用の窯がたくさんあり、マジョリカ焼き生産で有名なファエンツァ⁶⁰産のような陶器が生産されていたことが記録に残っている⁶¹。



旧市街地にあるノートル・ドメニコ広場には、1686年に建設されたこの地方でもっとも古い図書館がある。それは枢機卿フ

ランチェスコ・アントニオ・フィニ(Francesco Antonio Finy)にちなんでフィニ図書館といい、15世紀以前の本も含み13,000冊以上の蔵書を誇っている。

市壁の外にあるサン・セバスティアノ教会は15世紀にフランチェスコ会の小さき兄弟会士の修道院として建設されたが、16世紀初め、第8代グラヴィーナ伯のフェルディナンド2世により改築、拡張されている。内部には、美しい花のモチーフで装飾された柱のついた回廊で囲まれた庭がある。その回廊の上部には、最近修復された17世紀のフレスコ壁画が残っている(Fig.22)。



グラヴィーナ駅に隣接してマドンナ・デッレ・グラツィエ教会がある。この教会の注文主はジュスティニアニ・ダ・キオ観下で、1602年から50年の歳月を費やして建てられた。ファサードには観下の紋章である翼を広げた巨大な鷲のレリーフ(Fig.23)が刻まれ、それが見る者を圧倒する。



また、グラヴィーナの町の入口の道路沿いに大きな鳥のオブジェクトがある。それはコーラコーラという町のシンボルの鳥である(Fig.24)。白地に赤、青、黄、緑を中心とした色で彩色されているテラコッタ製の笛であり、その昔、羊飼いの若者たちが長い冬や夏の放牧に出かけるときに、それを必ず携え、笛を吹きながら家族や恋人に想いを馳せていたといわれている。今は可愛くて人気のある装飾品として扱われている。



さらに、町では古くから続いている祭りがある。1294年、アンジュー家の2代目カール2世時代、グラヴィーナ伯ジョヴァンニ・ディ・モンフォルト(Giovanni di Monfort)が国王に「聖ジョルジョの祭り」を開催する許可を求め、それ以来、この祭りは毎年4月23日、聖ジョルジョの日で開催されている。町の人々は中世風の服を身にまとい、歌を歌い、曲を奏でながら町中を練り歩く。野外で踊ったりゲームに興じたりしながら、祭りは3日間続けられる。

最後に、このように約3,000年続くグラヴィーナの旧石器時代からの歴史をみると、支配者が交代するごとに、その文化や宗教を受け入れてきたため、さまざまな影響を受けてきたことが理解される。B.C.8世紀以降のギリシア植民市時代から続くローマ支配下のギリシア・ローマ文化、6世紀以降のビザンツ帝国時代のビザンティン文化、11世紀ノルマン朝から始まるラテン・ローマカトリック文化圏のロマネスク様式、13世紀フランスのアンジュー家支配時代にはゴシック様式、14世紀ナポリ王国時代にはルネッサンス様式が入り、15世紀以降のスペインのアラゴン家支配時代のバロック様式などあらゆる文化が融合され、今日のグラヴィーナの文化を形成してきたといえる。

この一都市の風土、歴史、文化を中心に南イタリアをみてきたわけだが、昨今の民族的対立・宗教的対立を考えると、今日のヨーロッパを、あるいは世界を包括的に理解するうえで、同時代にギリシア・ビザンツ文化圏、ラテン・キリスト教文化圏、アラブ・イスラーム文化圏⁶²が共存していた歴史を持つ南イタリア研究の意義は計り知れないものがある⁶³と認識を新たにす。グローバルな視点を持ち、異民族・異文化に対して対立や排除ではなく、共存・融合への道をさぐる必要性を感じる今、南イタリアの歴史や文化を多角的な視点から研究することは、これらの問題に新たな解決方法を提言するであろうと理解される。

註

¹ Giovanni Pacella, GRAVINA IN PUGLIA, p.76, Mario Adda Ed., Bari, 2011.

² 古代ローマにおいては、大土地所有者が労働力として奴隷を使う大規模農業生産をおこない、中世の封建社会になると、封建領主が農奴を耕作者として大土地経営をした制度

³ 竹内啓一：地域問題の形成と展開，pp.30-33，大明堂，1998。

⁴ フェルナン・ブローデル，浜名優美訳：地中海Ⅰ，p.554，藤原書店，2004，16世紀のヴェネツィアの交易の叙述で、プーリア地方の小麦とワインのことがふれられている。

⁵ 木下やよい：南イタリア・プーリアへの旅，p.1，小学館，2006。

⁶ 北原敦：イタリア史 新版世界各国史 15，P407，山川出版社，2008。

⁷ 木下，p.74，前掲書。「ラーマルンガの鍾乳洞の中で，1993年アルタムーラ原人が発見された。ネアンデルタール人より約30万年から5万年前の人骨である。」

⁸ 北原，pp.16-17，前掲書。

⁹ Pacella，pp.11-12，op.cit.

¹⁰ “Side”は，“ザクロ”の意味である，この地は古代からザクロの産地だったと考えられる。

¹¹ 前述したが，古代においてはこの地は樹木が茂る豊かな土地であった。“Silvium”は“silva”（樹木，森）という語と関係があるだろう。

¹² 北原，pp.65-66，前掲書。

¹³ 401年西ゴート族のイタリア侵入，405年東ゴート族のイタリア侵入，410年西ゴート族のローマ劫掠，439年ゲルマン民族の中でもっとも野蛮と恐れられていたヴァンダル族による北アフリカのヴァンダル王国建国，452年フン族のアッティラ王による北イタリア侵入など枚挙にいとまがない。

¹⁴ 北原，pp.126-127，前掲書。

¹⁵ キリスト教の教派のひとつ。ローマ帝国の東西分裂後，コンスタンティノープルの教会を中心に，ビザンティン文化圏で信仰されていた。現在も，ギリシア，ロシアをはじめ，おもに東ヨーロッパに信徒が多い。

¹⁶ 高山博：中世シチリア王国，pp.34-35，講談社現代新書，1999a。

¹⁷ 首都コンスタンティノープルから派遣された一人の長官に民政と軍政とを委任するビザンツ帝国独自の統治組織

¹⁸ 外敵の侵入が激しかった南イタリアでは，大天使ミケーレによって守られるという信仰が広まる。

¹⁹ エジプトのシーア派イスラーム王朝（909-1171）

²⁰ Salvatore Laddaga, GRAVINA IN PUGLIA Città dei Parchi, al CENTRO delle METE TRURISTICHE, Catalogo Turistico Culturale, p.4, l'Edizione, 2010-2011,

²¹ 竹部隆昌：“ビザンツ領南イタリア社会の変貌”，西洋史学，169，p.19，1993a。

²² 竹部，pp.19-20，前掲書，1993a。

²³ 竹部，p.31，前掲書，1993a。

²⁴ ノルマン人によるヨーロッパ大移動の中，911年首領ロロに率いられたノルマン人たちが北フランスにノルマンディー公国を建設した

²⁵ 高山博：中世地中海世界とシチリア王国，pp.70-72，東京大学出版会，1993b。

²⁶ Pacella，p.14，op.cit.しかし，高山によるとグラヴィーナがノルマン人支配下に入ったのは，ロベルトゥス・グイスカルドゥスの時になっている。しかし，Laddagaによると，オートヴィル家の封土になった年代は1069年となっている。

²⁷ Laddaga，p.5，op.cit.

²⁸ 高山，pp.189-191，前掲書，1993b。

²⁹ 高山，p.215，前掲書，1993b。

³⁰ スペインのナヴァーラ王ガルシア6世の王女

³¹ そのほかのグラヴィーナ伯の名前は，高山，Appendices p.73，前掲書，1993b，に詳しい。

³² 高山，pp.186-192，前掲書，1999a。

³³ ジョルジョ・ヴァザーリ，森田義之監訳：ルネサンス彫刻家建築家列伝，pp.24-25，白水社，1989，ニコラ及びジョヴァンニ・ピサーノの項に書かれている。

³⁴ フランスの国王。熱心にキリスト教を保護し，第6回，第7回十字軍を指揮した。

³⁵ イタリア中世末期の画家。ヨーロッパ近代絵画の創始者とされる。

³⁶ アラゴン家，フランスのシャルル8世による征服(1495)，スペイン・ハプスブルク家，オーストリア総督統治時代(オーストリア・ハプスブルク家)，スペイン・ブルボン家

³⁷ Pacella，p.14，op.cit. Laddaga，p.11，op.cit.では，オルシーニ家による支配の終わりは1817年になっている。

³⁸ 祖国の統一と自立をめざし，ナポリで結成された秘密結社

³⁹ Laddaga，p.5，op.cit.

⁴⁰ ぶどう酒に水や蜂蜜などを混ぜる容器

⁴¹ ローマ時代，浴槽から立ち上る湯気で皮膚の角質を柔らかくし，身体の汚れを掻き落とす道具

⁴² 偶像崇拜禁止というキリスト教の教えから，聖像に対する崇拜を禁止し，聖像を破壊する運動。

⁴³ 木戸雅子：“南イタリアにおけるロマネスク壁画とビザンティン絵画”，共立女子大学国際文化学部紀要，12，p.64，1997。

⁴⁴ 上田，寺田，中澤，木戸：ディオニシオスのエレミア，p.385，金沢美術工芸大学美術工芸研究所，1999。

⁴⁵ 高橋保行：ギリシア正教，pp.43-44，講談社学術文庫，1980。

⁴⁶ 中世ヨーロッパにおける大文化活動に大きな役割を果たし，14世紀から始まるイタリア・ルネサンスの導火線にもなったと考えられる

⁴⁷ 伊東俊太郎：12世紀ルネサンス，pp.204-207，講談社学術文庫，2006。

⁴⁸ 高山，p.6，前掲書，1993b。

⁴⁹ 高山博：神秘の中世王国，pp.248-249，東京大学出版会，1995c。

⁵⁰ 歴史学研究会編：世界史史料 第5巻ヨーロッパ世界の成立と膨張 17世紀まで，pp.95-97，岩波書店，2007，ノルマン人の教皇に対する忠誠宣誓

⁵¹ 竹部隆昌：“九-十一世紀南イタリアとコンスタンティノープル”，文化史学，44，pp.106-109，1988b。

⁵² Pacella，pp.47-48，op.cit.

⁵³ クロアチアのアドリア海沿岸地域一帯のこと

⁵⁴ 教会の入り口上にある横木とアーチによって区画された装飾的壁面のことで，半円形のものが多い。

⁵⁵ イタリア語ではorso，複数形はorsiとなり，オルシーニ家を連想させる

⁵⁶ 代禱とは，死者の贖罪と冥福を願う祈りのこと。

⁵⁷ 宗教画に写実とコントラストの強い明暗法をとり入れ，バロック美術に大きな影響を与えたイタリアの画家。

⁵⁸ フェルディナンド3世の死後，未亡人となったジョバンナ・フランチバーネはアンジェロ・ソリメーナにその仕事を完成させている。

⁵⁹ マジョルカ島の商人がもたらした陶器をもとにして，15世紀イタリアで発達した彩画陶器。

⁶⁰ マジョリカ焼きで有名な北イタリアの都市

⁶¹ エットーレ・ボマリチ・サントマジ財団博物館のパフレットには，Battista Pacichelli: Regno di Napoli in prospettiva, 1703 に記録があると書かれている。

⁶² アラブ・イスラーム文化圏の影響は，特にシチリアでみられる。

⁶³ 高山，pp.5-7，前掲書，1993b。



峡谷にかかる水道橋(18 世紀)



コーラ・コーラ



市場



フレデリクス 2 世の城跡(13 世紀)



マドンナ・デッレ・グラツィエ教会 (17 世紀)



パードゥレ・エテルノ教会への道
(手前はパードゥレ・エテルノ遺跡)



ブルガトリオ教会 (17 世紀)



サン・セバスティアーノ教会(15~17 世紀)